

粘土を使用した立体作品の表現方法（1）

岡本 直行¹⁾*

1) 新見公立短期大学幼児教育学科

(2017年11月15日受理)

美しい自然の中でも複雑でありながら均整のとれた美を持つのが人間であると考え。そこで、自然から生成された土のよさを感じながら、量による立体作品（人体彫刻）の制作を試みた。人体のかたちを追及していく過程で重要なのは、人体を大きな量の塊として捉え、作品全体の流れや流れから生まれるよさや味わいを追及することと考える。

心象を豊かに表現するためには、かたちの構成や表面処理技術の習得、量に込めた心象、作品のかたちと色の関連にも配慮することが求められる。作品のかたちは作者の内面が表出したものであり、かたちに合う色の選択や着色方法にも工夫を凝らす必要がある。

(キーワード) 彫刻、造形表現、美術、粘土

1. 粘土を使用した彫刻作品

これまで、この世で一番美しいのは自然であり、その中でも複雑でありながら均整のとれた美を持つのが人間であると考え、自然から生成された土のよさを感じながら、量による人体彫刻制作を試みてきた。人体のかたちを追及していく過程で重要なのは筋肉の構造でなく、人体をより大きな塊として捉え、作品全体の流れの美しさや、その流れが生み出す周囲の空間の構成などを追及していくことと考える。

心象を自分の軌跡として豊かに表現するためには、かたちの構成やマチエールなど、表面処理技術の習得や、量に込めた心象を鑑賞者によりよく伝えるために、作品のかたちと色の関連にも配慮する必要がある。作品のかたちは作者の内面が表出したものであるが、そのかたちに合った色を選択することや、着色方法に工夫を凝らすことが必要であり、これまでの研究では、かたちと色のイメージを探りながら制作活動を進め、作品に込めた想いを表しやすい着色方法、例えば、顔料の溶き方、塗り重ね方、刷毛の動かし方などを探求してきた。

本稿では、これまで制作した作品の中から、3点を取り上げ解説するとともに、日本美術展覧会（日展）での鑑査結果を報告する。

① 「水のささやき—蜚—」

183cm×65cm×50cm ポリエステル樹脂

新見市のキンボタルの美しさやか弱さ、蜚の生息する自然の素晴らしさや静けさなどに感動した想いを表現した

いと考え、静かに佇み、微かに聞こえる水の流れに耳を傾ける女性像に重ね表現した。人体彫刻の基本的な姿勢は重心を片足のうちくるぶしに落とし（片足重心）、コントラポストを描く身体を持つものとされている（ギリシャ彫刻の基本的なポーズであり、最も均整の取れたもの）が、じっと動かずに潜む感じを表現するために、制作ではあえて両足重心とした。ただし、足を軽く開いて立つ両足重心の作品であり、重心の落ちるポイントが分かりづらさが作品の安定感を左右するため、重心と全身のバランスに細心の注意を払った。蜚に抱いたイメージから、均整の取れた体幹を持たせ、肉付きは浅く滑らかに表現した。着色においては森の空気感と蜚の活動する時刻等を表現したいと考え、下地に萌黄色やエメラルドグリーン、鶯色の緑系を塗り重ね、表面にアンバー赤とダイヤモンドブラックを混色した茶系の顔料をテレピン油で薄めに溶き塗り重ね、しっとりとした表情を演出した。

② 「明日の詩」

183cm×90cm×60cm ポリエステル樹脂

人体の上半身をひねった時のムーブマンやリズム、構成、量の構築を追究することを目的としてポーズを設定した。彫刻においては、心象をかたちの構築や彫刻の要素を駆使して表現することが求められるため、ポーズを先に決定することはタブーとされるが、今回は、人体彫刻彫刻の基本形である柱や量の構築を追求するため、また、初心に戻り、彫刻の基礎の振り返りを行うためにエスキースとして制作した。胴部のひねりを見えやすくするために、両腕を挙げ後頭部で手を組むポーズとし、体幹の制作を重視し

*連絡先：岡本直行 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

た。着色においては、アンバー赤とアンバー黒の2色を重ねるのみとし、立体に現れる陰影によるかたちの表出を心がけた。今回の研究が今後の制作活動の起点となることや展望の意をこめて「明日の詩」と名付けた。

③ 「風薫る」

182cm×55cm×40cm ポリエステル樹脂

新緑の季節には木枯らしの木々が芽吹き、鮮やかな緑に染まり、爽やかな風が吹き抜ける。新芽は小さく弱々しく見えるが、内に秘めた力強さで成長していくことであろう。植物が成長していく様や自然の偉大さを少女の心や姿に重ね、様々な不安を持ちながら強い覚悟で成長しようとする少女の心を表現した。今は弱々しく見える少女の心（植物）が加速的に成長していく速度感や風が吹く爽快感を表現するために、肉付きを極限まで削り落とし細身の像とした。また、量の構築では、ムーブマン（動勢）が地面から頭部までずっと伸びるように、直線的に構成した。着色は、少女が秘めた幾重もの想いと木枯らしの木々の状態を表現するために発色のよい金、銅など金属系顔料を下地として塗り重ね、表面にアンバー赤、アンバー黒など茶系の顔料を重ねる方法をとった。また、乾燥した表面の顔料を磨き削り取ることによって、幾重にも重ねた顔料の色みの変化を出し色彩による表情を出した。

II. 日展の鑑査結果

前述の作品3点は、日展の公募展に出品し鑑査を受けた作品である。鑑査結果は以下の通りであった。

①水のささやき—蛭— 第38回日展 入選

第38回日展

会期：2006年11月2日～11月24日

場所：東京都美術館

②明日の詩 第39回日展 入選

第39回日展

会期：2007年11月2日～12月9日

場所：国立新美術館

③風薫る 第40回日展 入選

第40回日展

会期：2008年10月31日～12月7日

場所：国立新美術館

文献

- 1) 岩野勇三；彫塑—制作と技法の実際，日貿出版社，1995
- 2) 本郷伸；彫刻の美，富山房，1942
- 3) 村上裕介；彫刻における具象（人体）表現について，兵庫教育大学，45-53，1996
- 4) 前嶋英輝；彫刻の量の構築と認識—「地の蔵」の制作より—，順正短期大学研究紀要34号，63-70，2005
- 5) 岡田敬司；彫刻の原理，弘前大学教育学部紀要第66号，55-68，1991
- 6) ハーバード・リード；芸術の意味，みすず書房，1966
- 7) 小西美良；彫刻の美について，美術教育vol.1951No.2，26-27，1951



①水のささやき—蛭—.

岡本 直行



②明日の詩

粘土を使用した立体作品の表現方法（1）



③風薫る

